

子どもの健やかな心と体を育てるための教員の意識

(保健体育講座) 糸岡 夕里・日野 克博

(高松市立栗林小学校) 上村 憲

The teacher's consciousness to bring up children's healthy heart and body

Yuri ITOOKA, Katsuhiko HINO and Ken UEMURA

(平成 30 年 9 月 28 日受理)

抄録：本研究では、健やかな心と体を育てるための教員の意識を検討するため、2017年7月から9月にかけて、幼稚園教諭（95名）、小学校教諭（103名）を対象に質問紙調査を行った。

その結果、以下の3点が明らかとなった。①運動遊びの実態については、小学校教諭より幼稚園教諭の方が、60分以上の運動遊びをしている子どもが多いと回答していた ($\chi^2(2) = 11.70, p < .01$)。②幼稚園教諭、小学校教諭の感じている運動遊びに対する必要性については、t検定の結果、両者の間に有意差はみられなかった。③運動遊びの工夫の視点については、どの程度意識をしているのか、幼稚園教諭、小学校教諭の回答をt検定により比較した結果、「①思わず体を動かしたくなる」($t = 1.70, p < .05$)、「④地域の公園などを利用」($t = 5.37, p < .01$)の2項目において有意差がみられた。

キーワード：健やかな心と体 (healthy heart and body), 教員の意識 (teacher's consciousness)

1. はじめに

近年、我が国において社会環境の変化から子どもの体力や運動能力の低下、運動離れが問題となっている。これらの問題に対して、「幼児期運動指針」(文部科学省, 2012)では、「幼児期は日常生活での運動、表現に用いる運動、労働での運動、スポーツにおける運動といった人間の生涯にわたってさまざまな場面において必要な運動の基になる、基本的な動きを幅広く獲得する非常に大切な時期であり、幼児期はまさに、運動における基礎づくりの段階にある」と記されている。また、「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについての報告」

(文部科学省, 2016)では、「幼児期の多様な運動経験などがその後の運動能力に大きな影響を与える」と記されている。さらには、長野県箕輪町の全保育園で2005年度から運動遊びの中に自ら楽しんで取り組める運動プログラムを導入した子ども達が、小学校5年生に成長して全国体力・運動能力調査を行った結果、箕輪町の5年生は全国トップクラスの得点が出たという報告がある(柳澤秋孝・柳澤有希, 2014)。

これより、幼児期の運動経験や運動習慣がその後の成長に大きく関係していることがうかがえる。

幼稚園教育の現状や実態に関して「幼児期における運動遊びに関する調査」(群馬県総合教育センター幼児教育センター, 2014) では、運動遊びの具体的な実践方法に関する質問において、「外遊びや園庭遊びの奨励」が最も多く、次いで「遊びの時間を意図的に設定している」、「自由遊び」と続いている。このことから、幼稚園における運動遊びでは、環境や時間の提供などの工夫はされているが、体を動かすための具体的な工夫についての実態が明らかになったとは言い難い。

そこで本研究では、幼稚園教諭と小学校教諭に対する質問紙調査を行い、健やかな心と体を育てるための教員の意識について明らかにすることを目的とした。

現状の保育園、幼稚園教育の制度では、運動遊びの内容や実施頻度については、各園によって様々であるという実態がある。だからこそ、健やかな心と体を育てるため幼稚園教諭が運動遊びについて、どのように意識しているのかが、子どもの保育環境と密接にかかわることが予想される。同様に、小学校教諭についても、教員の意識が学級経営や体育授業、体育・健康に関する指導と深くかかわっていることから、本研究の意義は大きいと考えた。

2. 方法

(1) 質問紙調査

子どもの健やかな心と体を育てるための教員の意識について検討するために、幼児期運動指針(文部科学省, 2012)で推奨している「毎日、合計60分以上、楽しく体を動かす」ことについて、その実態と必要性について2つの質問項目を作成した(図1)。なお、運動遊びの実態については、「0~3割程度」「4割~6割程度」「7割以上」の3件法で、運動遊びの必要性については、「とてもそう思う」から「全く思わない」の5件法により回答を求めた。

また、幼児期運動指針の推進に当たって、保育者に向けた提案として示された工夫の視点について4つの質問項目を作成し、「大いに当てはまる」から「全く当てはまらない」の5件法により回答を求めた(図2)。

1. クラスのどれくらいの子が60分以上の運動遊びを行っていますか。

0~3割程度 - 4割~6割程度 - 7割以上

2. 毎日60分以上の運動遊びを行うことは必要だと思いますか。

とてもそう思う 5 - 4 - 3 - 2 - 1 全く思わない

図1 運動遊びの実態とその必要性についての質問

①子どもが思わず体を動かしたくなるような工夫をしていますか。

大いに当てはまる 5 - 4 - 3 - 2 - 1 全く当てはまらない

②子どもが挑戦意欲をかき立てられるような工夫をしていますか。

大いに当てはまる 5 - 4 - 3 - 2 - 1 全く当てはまらない

③苦手意識のある子どもが安心して取り組めるような工夫をしていますか。

大いに当てはまる 5 - 4 - 3 - 2 - 1 全く当てはまらない

④遊びを行う際に、地域の公園や施設などを利用していますか。

大いに当てはまる 5 - 4 - 3 - 2 - 1 全く当てはまらない

図2 運動遊びの工夫の視点についての質問

(2) 調査対象及び時期

2017年7月27日、8月5日に愛媛県内の幼稚園教諭95名、8月15日に愛媛県内の小学校教諭47名、9月11日から9月25日にかけて香川県内の小学校教諭56名、合計198名(幼稚園教諭95名、小学校教諭103名)を対象に質問紙調査を実施した。なお、回答の不備については除外したため、有効回答数は幼稚園教諭88名、小学校教諭98名であった。

(3) 倫理的配慮

質問紙調査を実施するにあたっては、質問紙の冒頭に研究の趣旨について明記し、研究協力の同意を得た。くわえて、調査対象者へ対し、研究への参加は任意であること、研究への参加の有無にかかわらず不利益が生じないこと、データの管理を厳重に行うこと、学会や論文等で研究成果を公表すること、またその際、個人を特定することはしないことを口頭で説明した。

(4) 分析

データの分析については、フリーソフトjs-STARを利用し統計処理を行った。

3. 結果および考察

(1) 運動遊びの実態とその必要性

運動遊びの実態について、幼稚園教諭、小学校教諭の各回答を χ^2 検定により比較した。表1は、運動遊びの実態についての回答数と χ^2 検定の結果について、図3は、運動遊びの実態についての回答率をグラフで示した。

「1. クラスのどれくらいの子が60分以上の運動遊びを行っていますか」という質問に対し、幼稚園教諭の回答は、「4割～6割程度」の回答が最も多く(42.0%)、次いで「7割以上」(34.1%)、「0～3割程度」(23.9%)であった。小学校教諭の回答は、「0～3割程度」の回答が最も多く(42.9%)、次いで「4割～6割程度」(41.8%)、「7割以上」(15.3%)であった。

χ^2 検定の結果、人数の偏りは有意であり($\chi^2(2) = 11.70, p < .01$)、「0～3割程度」の回答は小学校教諭の方が有意に高く、「7割以上」の回答は幼稚園教諭の方が有意に高かった。

小学校教諭、幼稚園教諭の各回答より、児童より幼稚園児の方が60分以上の運動遊びを実施していることが推察できた。幼稚園における教育課程は自由保育であり、日中の運動遊びについて把握がしやすい。一方、小学校における教育課程は教科等の時間割という制限があり、校内で60分以上の運動遊びを実施することは困難であり、校外で運動遊びを実施し小学校教諭が十分に把握できていないことも予想される。しかしながら、近年の子どもを取り巻く環境をふまえると、大きな差異はないことが予想され、幼稚園教諭の23%、小学校教諭の42%が60分以上の運動遊びを実施しているのは「0～3割」と回答したことは、健やかな心と体の育成に向けての課題として挙げられる。

次に、運動遊びの必要性について、幼稚園教諭、小学校教諭の各回答をt検定により比較した。表2は、運動遊びの必要性についての平均値と標準偏差、t検定の結果について、図4は、運動遊びの必要性についての平均値をグラフで示した。

「2. 毎日60分以上の運動遊びを行うことは必要だと思いますか」という質問に対し、「とてもそう思う」から「全く思わない」の5件法により回答を求めた結果、幼稚園教諭の回答の平均値は3.66、小学校教諭の回答の平均値は3.88であった。t検定の結果は、有意差なしであった。

これより、運動遊びの必要性について、幼稚園教諭、小学校教諭ともに差異はないことが推察された。幼児期運動指針(文部科学省, 2012)において60分以上の運動遊びが推奨されていることや、第2期スポーツ基本計画(文部科学省, 2017)において「学校における体育活動を通じ、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育てるとともに、放課後や地域における子供のスポーツ機会を充実する」という施策目標が掲げられていることから、幼稚園教諭、小学校教諭ともに運動遊びの必要性についての意識をより高めていくことが、健やかな心と体の育成のためには重要となる。

表1 運動遊びの実態についての回答数 (χ^2 検定)

	0～3割程度	4割～6割程度	7割以上
幼稚園 (n=88)	21 (23.9)	37 (42.0)	30 (34.1)
小学校 (n=98)	42 (42.9)	41 (41.8)	15 (15.3)
χ^2 検定	**		**

** : p < .01

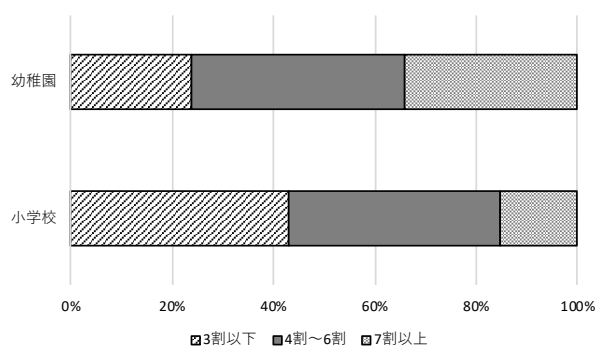


図3 運動遊びの実態についての回答率 (χ^2 検定)

表2 運動遊びの必要性についての平均値・標準偏差 (t検定)

	幼稚園 (n=88)	小学校 (n=98)	t値
	M (SD)	M (SD)	
毎日60分以上の運動遊び	3.66 (0.87)	3.88 (0.79)	-1.64

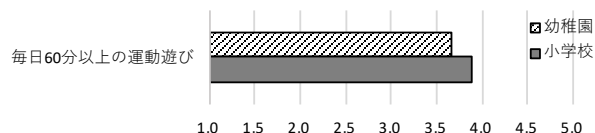


図4 運動遊びの必要性についての平均値

(2) 運動遊びの工夫の視点

運動遊びの工夫の視点について、幼稚園教諭、小学校教諭の各回答を t 検定により比較した。表 3 は、運動遊びの工夫点についての平均値と標準偏差、t 検定の結果について、図 5 は、運動遊びの工夫点についての平均値をグラフで示した。

運動遊びの工夫の視点について、全 4 項目の質問に対し、「大いに当てはまる」から「全く当てはまらない」の 5 件法により回答を求めた。「①子どもが思わず体を動かしたくなるような工夫をしていますか」という質問では、幼稚園教諭の回答の平均値は 3.63、小学校教諭の回答の平均値は 3.42、「②子どもが挑戦意欲をかき立てられるような工夫をしていますか」という質問では、幼稚園教諭の回答の平均値は 3.58、小学校教諭の回答の平均値は 3.65、「③苦手意識のある子どもが安心して取り組めるような工夫をしていますか」という質問では、幼稚園教諭の回答の平均値は 3.82、小学校教諭の回答の平均値は 3.70、「④遊びを行う際に、地域の公園や施設などを利用していますか」という質問では、幼稚園教諭の回答の平均値は 2.53、小学校教諭の回答の平均値は 1.73 であった。

t 検定の結果、「①子どもが思わず体を動かしたくなるような工夫をしていますか」($t=1.70$, $p<.05$)、「④遊びを行う際に、地域の公園や施設などを利用していますか」($t=5.37$, $p<.01$) の 2 項目について有意差があり、小学校教諭より幼稚園教諭の方が強く意識していることがうかがえた。

これより、幼児教育は環境を通して学ぶといわれるように、小学校教諭より幼稚園教諭の方が思わず体を動かしたくなるような工夫ができていることが示唆された。地域の公園や施設の利用については、幼稚園教育の方が活用しやすい環境であり、小学校の教育課程からは日常的な利用は困難であることが明らかであった。

また、地域の公園や施設の利用については、他の項目に比較し、幼稚園教諭、小学校教諭ともに低い値であった。このことは、幼稚園や小学校に十分な施設があるためなのか、あるいは利用したくても利用できない状況なのか本研究の結果からは十分な考察が困難であった。

表 3 運動遊びの工夫点についての平均値・標準偏差 (t 検定)

	幼稚園 (n=88)		小学校 (n=98)		t 値
	M	(SD)	M	(SD)	
①思わず体を動かしたくなる	3.63	(0.44)	3.42	(0.91)	1.70 *
②挑戦意欲がかき立てられる	3.58	(0.55)	3.65	(0.76)	-0.62
③安心して取り組める	3.82	(0.43)	3.70	(0.71)	1.03
④地域の公園などを利用	2.53	(1.29)	1.73	(0.79)	5.37 **

* : $p<.05$, ** : $p<.01$

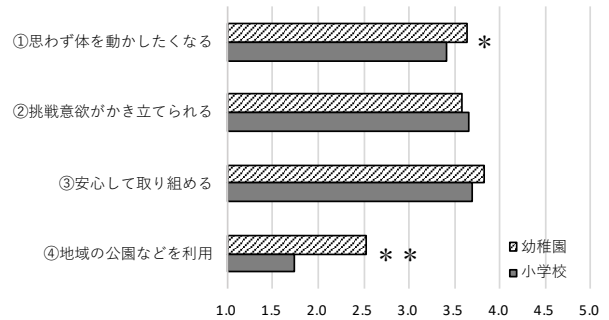


図 5 運動遊びの工夫点についての平均値 (t 検定)

4. まとめ

本研究では、健やかな心と体を育てるための教員の意識を検討するため、幼稚園教諭、小学校教諭を対象に質問紙調査を行った。

その結果、以下の 3 点が明らかとなった。

- 「1. クラスのどれくらいの子が 60 分以上の運動遊びを行っていますか」という質問に対し、幼稚園教諭と小学校教諭が感じている運動遊びの実態については、 χ^2 検定の結果両者の間に有意差がみられた ($\chi^2 (2) = 11.70$, $p<.01$)。

幼稚園教諭の 23%、小学校教諭の 42% が 60 分以上の運動遊びを実施しているのは「0~3 割」と回答したことは、健やかな心と体の育成に向けての課題として挙げられる。

- 「2. 毎日 60 分以上の運動遊びを行うことは必要だと思いますか」という質問に対し、幼稚園教諭、小学校教諭の感じている運動遊びに対する必要性については、t 検定の結果、両者の間に有意差はみられなかった。

幼稚園教諭、小学校教諭ともに有意差はみられなかったものの、運動遊びの必要性についての意識を

より高めていくことが、健やかな心と体の育成のためには重要となる。

3. 運動遊びの工夫の視点について、どの程度意識をしているのか、幼稚園教諭、小学校教諭の回答を t 検定により回答した結果、「①子どもが思わず体を動かしたくなるような工夫をしていますか」(t=1.70, p<.05), 「④遊びを行う際に、地域の公園や施設などを利用していますか」(t=5.37, p<.01) の 2 項目において有意差がみられた。

幼児教育は環境を通して学ぶといわれるように、小学校教諭より幼稚園教諭の方が思わず体を動かしたくなるような工夫ができていることが示唆された。また、地域の公園や施設等の利用については、幼稚園教育の方が活用しやすい環境であり、小学校の教育課程からは日常的な利用は困難であることが明らかであった。

本研究の目的は、子どもの健やかな心と体を育てるための教員の意識について明らかにすることであったため、教員の意識が、どのように子どもの成長にかかわってい

るのかについては検討できていない。今後は、子どもの健やかな心と体を育てるための教員の意識が、どのように子どもの成長にかかわっているのかを検討していくことが課題である。

文献

- 群馬県総合教育センター幼児教育センター (2014) 幼児期における運動遊びに関する調査。
- 文部科学省 (2012) 幼児期運動指針。
- 文部科学省 (2016) 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについての報告。
- 文部科学省 (2017) スポーツ基本計画。
http://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/a_menu/sports/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/03/23/1383656_002.pdf (2018/9/25)
- 柳澤秋孝・柳澤有希 (2014) ころとからだがスクスク育つ! 0~5 歳児に合った楽しい運動あそび。